

らに置かぬようにせねばなりません、貨幣は只に
きけんなる品物なるのみならず、食の手からも病
人の手からもありとあらゆる人類の手から手へと
旅行してまわりますので、如何様な人の手から
来るかはかられませんから、誠にぶつそうせんば
んの品物であります、これによつてみても貨幣の
きたないことはあきらかたで、衛生の上からみても
おもちゃにさせてはいけないことはあきらかな次
第で御座います。(未完)

かゝる時こそ生命の惜しからめ

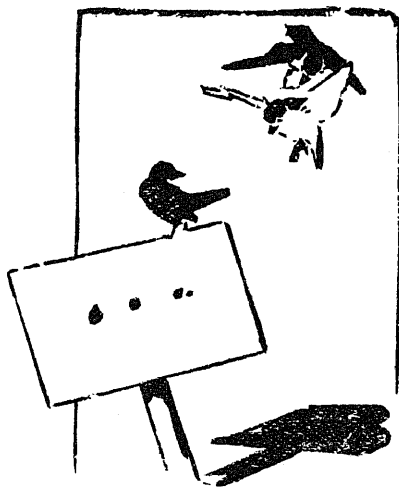
かねてなき身と思ひ知らずば

各宮妃殿下御歌

大日本歌道奨勵會が忠烈歌集を編纂して陸海軍
人に寄贈するの擧を聞召され、兩内親王殿下及び各
宮妃殿下より下賜されたる軍事に關する御歌を得
たれば左に掲ぐ

常宮昌子内親王殿下

出征の兵士をみて



勇いさみたつますらたけを、見る度なびに

つゝかなかれと祈いのりこそすれ

出征しゆつせいの將卒しやうそつを思おもひ遣やりて

くにのためいさむ心こころはもゆるとも

なれぬさむさに肌はだやこほらむ

旅順りよじゆん決死けつせい隊たいの行爲かうゐをさゝて

沈しづむべきふねに乗居のりゐて雄々むさしくも

みなとの口くちをふささつるかな

陸軍りよんの提報ていほうをさゝて

御軍みいくさはかちわたりぬとさくからに

先まつこそおもへ益良夫ますらふの身みを

昨日きのうまで露つゆのかさむし城しろのうへに

朝日あさひのみはた今朝けさなびくらし

雪ゆきのふりける夜よ

白妙しらたへにみゆきふり埋うづむからくへの

野のべにふすらん人ひとをしそ思おもふ

春はるの歌うたの中なかに

花鳥はなとりのいろにも香かにもなにとなく

こゝろとまらぬ春はるにもある哉かな

祝しゆくわい提會ていゑの提灯行ちやんせう列れつを見て

國民くんにんのよろこひいはふもろこゑは

みやこ大路だいぢうになりひゝきけり

周宮房子内親王殿下

出征しゆつせいの將卒しやうそつを思おもひ遣やりて

浦安うらやすのくにをはなれていくさひと

ゆきにふすらむもろこしか原はら

紀元節きげんせつの日ひに

御軍みいくさは日ひのもとつくにかちたりと

みたまも天てんにきこしめすらん

旅順閉塞隊りよじゆんへいそくたいの行爲かうゐをさゝて

鬼神きんかみも泣なきぬへさかな身みをすてゝ

ふねを沈しづめし仕しわささゝては

陸軍りくぐんの提報ていほうをさゝて

陸りの仇あかうちしほまれば先さきつ日ひの

ふないくさにも劣せらざりけり

祝捷しゆくせう會かいの提灯ていとう行ぎやう列れつを見て

ともしひをて手にたつさへて國民こくたみの

御代みよ祝いはふ聲こゑのいさましさかな

櫻さくらを見て心こゝろに思おもふことを

しさしまのやまと心こゝろのいささきよき

名なに句ことばはなんやまざくらはな

燕つばめの軒のきに巢すくふを

みくいさのありとも知しらて軒傳のきづたひ

のとかに遊あそぶつはくらめかな

夏なつのはしめに

冬ふゆよりもなほたへかたき夏なつはさぬ

身みをいたはれよ益ま良ら夫とのとも

閑院宮妃智恵子殿下

日露戦争にちろせんとうにつきて

ふないくさかちつゝきたる御みいくさは

くかにもわたをうちや盡つくさむ

山階宮妃常子殿下

折まにふれたる

朝夕あさゆふにかみにむかひてみいくさの

かつことをのみ祈いのるころかな

我君わがきみはいくさにいてゝまこゝろの

わらんかさりを盡つくしますらん

久邇宮妃倪子殿下

廣瀬中佐の勇いさましき戦死せんしを聞ききて

ものゝふのみちにちりにし櫻いざくらはな

一つの世までも香に匂ふらん
身は船とともに沈めてをしくも

賀陽宮妃好子殿下

折にふれたる

御軍のたゝかふことにかつみれば

神もいて、やまもりますらん

いくさ人つるさいよくととき磨き

しこのしこくさかり盡してよ

待旅順口陥落

今日も亦た鈴の音聞きてかのみなと

おちししらせを待ち渡るかな

雨中進軍

山みちにしのつくあめも物かはと

進むみいくさいさましきかな

遼陽の占領を祝し奉りて

うちつゝいさ仇のとりてを攻取りて

いと、か、やく日の御旗かな

伏見宮妃經子殿下

折にふれたる

とつ國の海路はるかにひくらし

わかみいくさのかちとさの聲

梨本宮妃伊都子殿下

綳帶製造をなしつゝ、

つゝとらぬ女なからもくにのため

なしえむかきり勉めてしかな

をりにふれて

日の御旗うらるの山に押し立て、

君か代うたふときは來にけり

後室北白川宮富子殿下

赤十字社にて綳帶をまきける時

白布にあかきこゝろをまきこめて

つなきとめはや人のたまの緒

出征の軍人を思ひやりて

いくさ人君かためとはいひなから

いかに寒さの身にはしむらむ

勝報をきゝて

かちいくさしらする文をみる度に

まつつはものゝ上をしを思ふ

後室華頂宮郁子殿下

をりにふれたる

御軍にいさをあらはすものゝふの

つよきこゝろを尊とかりける

久邇宮篤子殿下

水雷

四方の海に轟きにけりわたのふね

うちくたきつるいかつちの音

軍艦

日の本の國のまもりのいくさふね

かすそふ世こそ嬉しかりけれ

遠征軍をおもふ

君か爲とらふす野邊のゆきふみて

仇まもるらんますらをのとも

出征軍人の家族の心を思ひて

老らくの杖とたのみしひとり子も

家おもふなといましめにけん

騎兵

後れしとくつはみそろへ乗出す

駒のわかきのいさましさかな

待旅順陥落

かの港みなとわたのまもりのかたくとも

攻め入らん日はほとやなか覽かん

雨中進軍うちゅうしんぐん

雨降りて暗き夜半にもいくさひと

あたのとりにてに進み行くらん

遼陽の占領を祝ひ奉りて

こゝそとて仇の守りしとりてさへ

わかみいくさの物となりなき

秋の夜

東くめ子

病める子のれもわながめてつくくと

秋の長夜をひきあかしつる

和歌三首

湯川たき子

秋田

ゆたかなる稻葉の川中に袖ぬれて

身にしみ渡るあきの夕ぐれ

落葉

ふく風にあわとみだれてこずえより

道もなきまで散る木の葉哉

千鳥

小夜ふけて波に聲そふ浦千鳥

ねさめて聞けば八千代とぞなく

和歌二首

志田なか

なく虫の聲をきいても去年の秋

身まかりましゝ母をしぞ思ふ

きりたちてそことも分ぬ秋の野に

聲さやかに虫のなくなる